

# インペリアル・ オーストリアの遺産

Imperial Austria



# ハプスブルク物語

## 二人の賢者

Die Welt der Habsburger

池内紀

ドイツ文学者・エッセイスト

ハプスブルクは不思議な王家である。まず第一に、おそろしく長命だった。アルプスの一豪族から始まり、その王朝は640年にわたる。7世紀に及んで覇権を握り続けた王家は、ほかに類をみない。

第二に、その間、ほとんど血なまぐさい事件を起こさなかった。王権には権力をめぐる骨肉の争いがつきものであって、何代も続くにつれ、不義、毒殺、謀殺、斬首沙汰などがあとを絶たない。だがハプスブルク家には、これだけ長い統治にあって、その種のことがほとんどなかった。

第三に覇権のためには戦争が不可欠だが、ハプスブルクはまわりの状況から、やむなく出陣にいたるほかは戦わなかった。にもかかわらず広大な「日の没することのない国」を統治していた。

もう一つ、この王家の支配下にあった民族のこと。ゲルマン系、スラブ系、ラテン系、アジア系と多岐にわたり、こまかくいうと13の民族を数え、使われている言葉もまた、その数に応じていた。途方もない多民族国家が何世紀にもわたり、ひとつの王家のもとにあって、つつがなく存続した。これもまた世界史に類例のないことだろう。

五番目の不思議さは、現代とかがわっている。第一次世界大戦の終了とともにハプスブルクは世界のひのき舞台から退場した。もはや王権がモノをいう時代ではない。以来、90年にもなるというのに、ハプスブルクはくり返し甦ってくる。くり返し語られる。遠い昔の女帝が「大いなる母親」としてもどってくる。皇太子の心中がメロドラマになり、美しい皇妃がミュージカルの舞台上で歌っている。どの場合にも目印のようにして「ハプスブルク」がついている。

フランスのブルボン家も、イギリスのウィンザー王朝も、もはや歴史書にあるだけ。ときおり儀礼的に報道されるか、末裔がスキャンダルを起こしゴシップ記



事になる程度だが、ハプスブルクはいまなお脈々と生きている。伝統にも宗教にも文化にも、いぜんとしてハプスブルクが色濃く影を投げかけている。オーストリアの主だった都市にいて、ふと目を上げると、「双頭の鷲」が王冠をいただき輝いている。官庁や王宮教会にかぎらない。老舗のケーキ屋や酒屋の軒に、ハプスブルクの紋章がのっかっていたりするのである。

## マキシミアン1世

### Maximilian I

インスブルックを訪れた人は、きっと「黄金の小屋根」を見上げるだろう。凱旋門から続く広い通りの突きあたり、王宮のすぐ西どなり。現代のたたずまいは、多少とも風変わりなバルコニーだが、もともとは2千6百枚あまりにのぼる金箔張りの銅板で葺かれ、陽を浴びると、まさしく黄金の輝きをみせていた。

ハプスブルクのマキシミアン1世が15世紀末に、ミラノのスフォルツァ家の娘ビアンカを二度目の妻に迎えた記念に造らせた。そこに立ち、新妻とともに下の広場で催させる行事を見物する。実のところ、それは口実であって、むしろ民衆に、王家の富を見せつけるためだった。

たしかに豊かな財源に恵まれていた。インスブルックから10キロばかり東の町ハルで塩鉱が見つかったのは中世初期のこと。塩は当時、宝石にも等しい貴重品であって、イン河を往き来する船が毎



日のように、塩の塊をインスブルックに荷揚げしていた。そこから「塩の道」を通りヨーロッパ各地に運ばれた。その塩に課した税が宮廷の金庫をうるおした。

さらに父の代のことだが、イン渓谷の町シュヴァーツで銀鉱が発見された。年代記によると、「あらゆる鉱山の母」というべき良質のもの。マキシミアンはアウグスブルクの豪商フッガー家に採掘権をゆずりわたした。代わりに莫大な金が入ってくる。

ハプスブルクの基礎を築いたのは、こ

のマキシミアン1世だった。幾分か父や祖父に学んだところがあったかもしれない。18歳の息子マキシミアンとブルゴーニュ家の娘マリアを結婚させたのは、父フリードリッヒ3世である。それによってハプスブルクは南ドイツからネーデルランドを領有する大国になった。「汝、戦争せよ。我は結婚す」のハプスブルク・モットーの始まりである。マキシミアン自身、その政策を、さらに巧妙に活用した。

近郊のハルの町に造幣所が造られたのは、祖父の代のこと。当時は銀貨をどんどん造りさえすれば国は富むと考えられていたらしい。ドルの語源にあたる「ターラー」貨が大量に出廻って、経済がマヒ状態に陥った。有能な財務官をスカウトして、あとの二代がかりで急激なインフレを差しとめた。



マキシミアン1世の偉業を讃えるインスブルックの黄金の小屋根のレリーフ



インスブルックを歩くと、いたるところでマキシミアンの名前と出くわすだろう。現在の王宮はマリア・テレジアがロココ様式に造りかえたものだが、そのもとはマキシミアンに遡る。画家デューラーが描いているが、もっと簡素なつくりだった。

そのデューラーをはじめとし、マキシミアン1世は多くの画家、文人、人文学者たちを庇護した。アルプスの北は蛮地と思われていた時代に、チロルの一角にあって、豊かな宮廷文化の花を咲かせた。

マキシミアンが神聖ローマ皇帝に選ばれたのを記念してだろう、宮廷画家ハンス・ブルクマイルが甲冑姿の皇帝を描いている。そのかぎりではお定まりの姿だが、マキシミアンの場合、甲冑その

ものにも意味があった。ふつう鎧かぶとは、体に合わせた鉄の容器というものが、皇帝が身につけている甲冑は、首から胸、腰、腿、さらに脚にかけて、いちめんに波形が入っている。小さなナマコ板状の鋼鉄を組み合わせたものであることが見てとれる。

旧来の甲冑は身を守るよりも、重くて動きにくいのだ。マキシミアンは名の聞こえた甲冑師を自国に招き、自分でも工房に通って、軽くて動きやすい鎧かぶとを発明した。それは「マキシミアン式甲冑」として武具の歴史に名をとどめている。

この皇帝は軍そのもの、また戦術も大きく変えた。「ランツネヒト」と呼ばれた傭兵制はマキシミアンに始まる。騎士を招集するよりも失業者や農民を

傭うほうが安上がりで、効率がいい。銃兵、槍兵、剣兵などに編成し、曹長、伍長、旗手、副官、隊長と位階をつけて給金をちがえていく。出世を目指して、誰もが勇敢に戦う。

ランツネヒトの募集にあたり、「見栄えのいいもの」を優先して採用した。そのため応募者は工夫して、派手な服を着てやってくる。それをヒントに旗手、楽手、騎兵その他、いでたちを華やかにそろえて陣をつくらせた。ハプスブルクの軍隊は以後もながらく、戦果はともかくとして、パレードの華麗さで有名だったが、その伝統は遠く15世紀のマキシミアンに始まるといえるのだ。

皇帝はつねづね自分を「最後の騎士」と称していた。聡明な王は時代が大きく変わろうとしているのを、よく知っていたのだろう。いまや中世の終わり、そして近世の始まり。50歳をこえ、死に近づいたことを悟ったとき、奇妙なプランを立てた。宮廷教会の中央、ちょうど神の座と向き合う位置に自分の廟を据える。まわりに伝説のアーサー王や、ハプスブルクの始祖ルドルフ、最初の妻マリアなど、28体を配置し、さらに100体の聖者たちがとり囲む。いずれも王の葬儀に加わり、永遠に棺を見守っている。

壮大な死の儀式の構想は実行に移され、ニュルンベルクの工人たちが動員された。



インスブルックの宮廷教会

しかし、遅々として進まなかった。構想そのものが途方もない上に、巨額の費用を要する。完成よりも死のほうが早かった。1519年、リンツに向かう途上で、病いが悪化、マキシミリアンは母の眠るウィーナー・ノイシュタットに葬ることを指示して世を去った。

インスブルックの宮廷教会は、世界に類のないものだろう。主のいない巨大な霊廟の両脇に、28体の青銅の騎士や女性たちが居並んでいる。その不思議さは、マキシミリアンという謎めいた皇帝そのものでもある。デューラーの描いたマキシミリアン像があるが、つば広の帽子をかぶり、いたって地味な、思慮深げな人物であって、かたわらに王家の紋章がなければ、知恵深い町の長老と思うところだ。

## マリア・テレジア

### Maria Theresia

ウィーンを訪れた人は、きっとマリア・テレジアと会っている。一度は姿を目にしている。それと知らず見上げていたかもしれない。

リング通りをへだてて王宮のすぐとなり、美術史博物館と自然史博物館の間の大きな広場、さらにもうひとつ道路を隔ててMQことミュージアム・クォーター・ウィーン、そんな市中のとびきりの一角にマリア・テレジアがいる。ただ、台座が高いのと、まわりに人物像がいくつも配置されていて、中心の人がよく見えない。

彫刻家カスパー・フォン・ツンブッシュ作。1874年に下絵をつくり、完成したのが1887年だから、13年がかりの大仕事だった。ウィーンのとっておきの地にあるのは当然であって、まさにこの女帝のもとにハプスブルク・オーストリアは最盛期を迎えた。国と首都の守り神のように、マリア・テレジア像は王宮を



見守るかたちで据えられている。

まわりの像だが、一方には戦場で名を馳せた将軍たち、他方には国政の舵をとった政治家たち、それにグルック、モーツァルト、ハイドンなどの芸術家や学者たち。あきらかに記念像で栄光の時代を絵解きするスタイルになっている。

とすると、ここには大切な一人が欠けている。マリア・テレジアを盛り立てた最大の功労者、フランツ・シュテファンが刻まれていないのだ。

記念像の原案をつくったのは、歴史学者で、マリア・テレジアの伝記を書いたアルフレート・フォン・アレティンだそうだが、女帝の栄光をきわ立たせるために、その夫であって、最良のアドバイザーだった人を、歴史からきれいに

消しきったぐあいなのだ。

ロートリンゲン公フランツ・シュテファンがウィーン宮廷に入ったのは、1723年である。このときマリア・テレジアは6歳だった。13年後に婚姻がとりまとめられた。その翌年がトルコ戦争、つづいて第一次シュレージエン（シレジア）戦争、そしてオーストリア継承戦争、さらに七年戦争と、踵を接するようにして、国難が押し寄せた。

この間、女性君主のそばに寄りそう影のようにして一人の男性がいた。それは伝記作者にはお気に召さないようで、フランツ・シュテファンは栄光から省かれる。せいぜいがワキの添えもの。女帝に16人の世継ぎをもたらした「働き者」の役まわり。



むろん、そんなはずはない。15歳のとき、身一つで異郷の宮廷にやってきた。ちょうど後の皇妃エリザベートのように、古株の侍従や女官たちにイビられた。マリア・テレジアとの婚姻が成ったとき、王家を取り巻いてジンツェンドルフ伯爵を筆頭とする顧問官たちがいた。先王の息のかかった老公たちである。

ところが数年後、これら時代遅れのうるさ型にとって代わって、マリア・テレジア・チームというべき頭脳集団ができていた。中心にきわめて有能な誰かがいたからではないだろうか。

実際、この「影の人」は、きわめてすぐれたオーガナイザーであり、人間通だった。のみならず彼は君主がめったに備えていないもの、つまり経済の才を持っていた。打ちつづく戦争の時代にあって、王家の財政がもちこたえたのは、いち早くフランツ・シュテファンがとった重商主義政策と投資のおかげである。

マリア・テレジアは、もともと君主となるために生まれた人ではなかっただろう。もし兄のレオポルトが半年あまりで死ぬなどのことがなかったら、あるいはあとに弟が一人でも生まれていれば、彼女はごくおだやかな女の一生を送ったは

ずだ。どこやらの王家か大公のもとに嫁いで、気くばりのいい妻となり、しっかり者の母親になっていただろう。

いかに彼女が「帝王学」から遠いところで育てられたか。父カール6世は、のちのちまで男子誕生に期待をかけていたに違いない。娘の教育はマリア・カロリーネ・フックス公爵夫人に一任した。教養ある一人住まいの女性であって、当然のことながら、王の長女に女としてのたしなみやエチケットは仕込んだが、外交術は教えなかった。フランス語学習には

熱心だったが、戦術のイロハも知らなかった。

マリア・テレジア自身、自分が「世継ぎ」として不適格であることを知っていた。1740年、父カール6世死去。そのとき、いかにも女の言葉で述べている。

「私はまっ裸で王座についたのです」

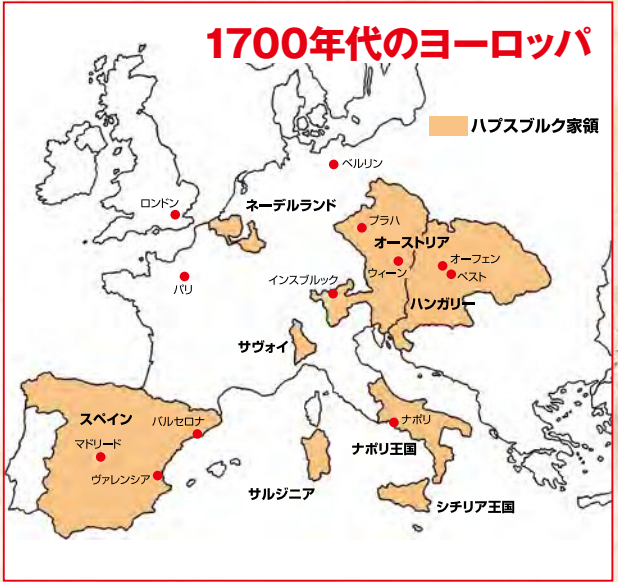
しかし、その座につくやいなや、めざましく変貌した。官僚を巧みに使い、必要とみれば外国人を登用するなど、人材をスカウトし法体系を整備させた。

1748年、アーヘンの和平によってオーストリア継承戦争が終着をみた。マリア・テレジアによる大いなる改革が始まるのは、この後の数十年間である。管理組織の一元化、教育改革、病院、施療院、貧民院の設立、軍部機構の整備、集合住宅の建設…。改革が相互に関連をもち、システムティックに進行したのは、青写真をつくり、強力に推し進めた知恵袋がいたからだ。事実、改革が着実に進んだのは、1765年のフランツ・シュテファンの死の前までであって、良き助言者を失ったのち、マリア・テレジアの治世はしだいにこわばりをみせていく。

「影の人」をもっともよく知っていたのは、いうまでもなくマリア・テレジアその人だった。インスブルックで夫が急



ウィーン美術史博物館前のマリア・テレジア像



死したすぐあと、これ以上ないほど正直に友人に打ち明けている。

「わたしはもう自分というものがわかりません。まるで獣のように生きており、感情も理性も失ったかのようです。朝5時に起き、夜遅く寝るまでの間、終日何もしていないのです。ああ、考えることすらできない」

子供たちには手紙で母親の気持ちを示した。

「あなた方のお父さんは、やさしい夫で、二人としない友人で、それにあらゆるこ

とにわたる陰の支え役でした」

夫を亡くしたのち、マリア・テレジアは終世、喪服のような黒服で通した。髪をひつつめにして飾りはつけない。有名な「マリア・テレジアの祈祷書」が残されている。正しくいと祈祷書にはさまれていた一枚の紙であって、そこに彼女は夫とともに過ごした歳月を確認するように、つぎの数字を書きとめていた。

「29年6ヵ月6日、29年、335ヵ月、1540週、1万781時間、35万8744分」

ゲーテが回想のなかでマリア・テレジ

アのことを語っている。母親から聞いたエピソードだそう。1745年、フランツ・シュテファンは「フランツ1世」の名のもとに神聖ローマ皇帝に選ばれた。その戴冠式がゲーテの故郷フランクフルトで挙行されたときのこと。

マリア・テレジアは宮殿のバルコニーで夫を待っていた。そこへ戴冠式をすませたフランツ・シュテファンがもどってきた。皇帝の冠をかぶり、重々しいガウンをまとい、黄金の笏をたずさえている。そんな夫の姿が、およそ珍妙に思えたのだろう。マリア・テレジアは、とめどもなく笑いだした。

広場に待機していた民衆が、それにつられて笑い出す。バルコニーの上の皇帝夫妻と広場の人々のあいだに、なんともなごやかな交流が生じた。そのあと上の二人が手を振ったとき、広場から熱狂的な挨拶が返ってきた。万歳の声がいつまでもやまなかった。

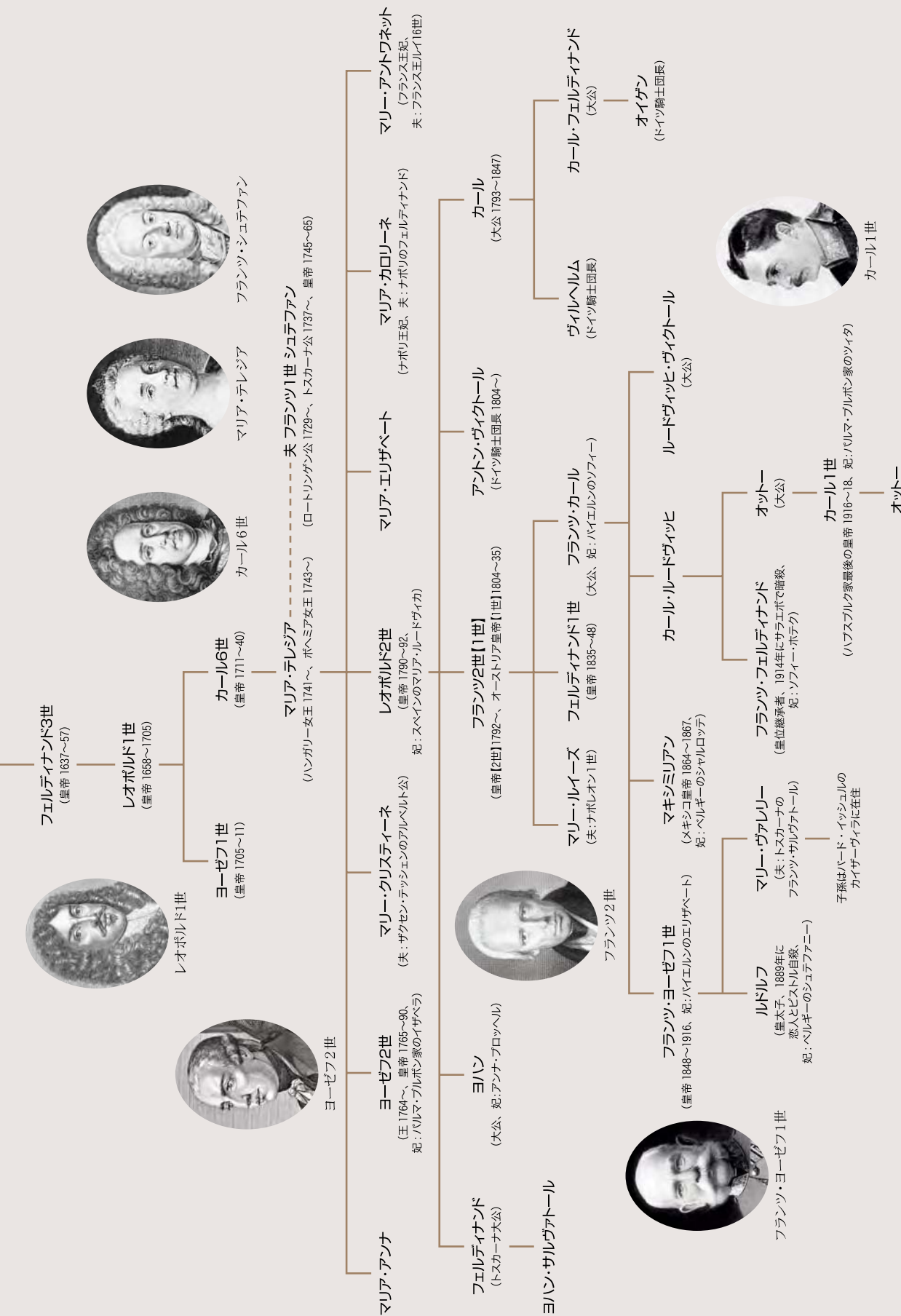
王家をめぐる、めったにないエピソードではなからうか。数ある歴史上の王族のなかでも、とりわけハプスブルクに似合っている。このおそろしく長命だった一族は、たしかに不思議な人間性と英知とをそなえていた。



ハプスブルク家の紋章「双頭の鷲」







フェルディナンド3世  
(皇帝 1637~57)

レオポルド1世  
(皇帝 1658~1705)

ヨーゼフ1世  
(皇帝 1705~11)

カール6世  
(皇帝 1711~40)

マリア・テレジア ----- 夫 フランツ1世 シュテファン  
(ハンガリー女王 1741~、ポヘミア女王 1743~) (ロートリンゲン公 1729~、トスカーナ公 1737~、皇帝 1745~65)

マリア・アンナ

ヨーゼフ2世  
(王 1764~、皇帝 1765~90、  
妃：ハルマ・ブルボン家のイザベラ)

マリー・クリスティーン  
(夫：ザクセン・テューレンのアルベルト公)

レオポルド2世  
(皇帝 1790~92、  
妃：スペインのマリア・ルードヴィカ)

マリア・エリザベート  
(ナポリ王妃、夫：ナポリのフェルディナンド)

マリア・カロリーネ  
(フランス王妃、  
夫：フランス王ルイ16世)

フェルディナンド  
(トスカーナ大公)

ヨハン  
(大公、妃：アンナ・フロツベル)

フランツ2世 [1世]  
(皇帝 [2世] 1792~、オーストリア皇帝 [1世] 1804~35)

アントン・ヴィクトール  
(ドイツ騎士団長 1804~)

カール  
(大公 1793~1847)

ヨハン・サルヴァートル

フランツ2世  
(大公、妃：アンナ・フロツベル)

マリー・ルイーゼ  
(夫：ナポレオン1世)

フェルディナンド1世  
(皇帝 1835~48)

フランツ・カール  
(大公、妃：バイエルンのソフィー)

カール・フェルディナンド  
(大公)



フランツ・ヨーゼフ1世

フランツ・ヨーゼフ1世  
(皇帝 1848~1916、妃：バイエルンのエリザベート)

マキシミリアン  
(メキシコ皇帝 1864~1867、  
妃：ベルギーのシャルロット)

カール・ルードヴィヒ  
(大公)

ルードヴィヒ・ヴィクトール  
(大公)

ルドルフ  
(皇太子、1889年に  
悪人とビストル自殺、  
妃：ベルギーのシュテファニー)

マリー・ヴァレリー  
(夫：トスカーナの  
フランツ・サルヴァートル)

フランツ・フェルディナンド  
(皇位継承者、1914年にサラエボで暗殺、  
妃：ウォー・ボテク)

オットー  
(大公)

オイゲン  
(ドイツ騎士団長)



カール1世

カール1世  
(ハプスブルグ家最後の皇帝 1916~18、妃：ハルマ・ブルボン家のソフィタ)

オットー  
子孫はバード・イッシュルの  
カイザー・ヴィラに在住

# 大司教の街 ザルツブルク

Salzburg, die Stadt der Erzbischöfe



ホーエンザルツブルク城

その輝かしい繁栄の歴史の中で、数々の称号を持つハプスブルク家が、長い間得られなかった称号が一つあります。それは、「ザルツブルク公爵」という称号です。南アメリカからハンガリーまで及ぶ広大な領土を有した強大なハプスブルク帝国といえども、1816年まで直接統治が出来なかったザルツブルク公国は、他とは違う特異な存在でした。

ザルツブルク公国は、カール大帝(742年～814年)の昔から、塩鉱が生み出す莫大な財力を基に、代々誇り高き大司教たちによって統治されていました。歴代の大司教たちは、ローマ教皇特使としての強大な地位と特権を最大限に利用し、広範囲に影響力が及ぶ優れた外交手腕と、抜け目ない政策によってザルツブルク公国の統治権を確固たるものにした。中世の教会の偉大なる聖職者たちは、自ら強大な政治の舞台に身を投じましたが、その一方でその後継者たちはザルツブルクという彼らの選ばれし玉座を飾ることに精力を注ぎ、賢明な手腕と上質なセンスで彼らの計画を実現していきました。彼らは、偉大なる名の下に、偉大なる決断をくだしました。ヴォルフ・ディートリッヒ・フォン・ライテナウ、マルクス・シティクス、ヨハン・エルネスト・トゥーン伯爵、フランツ・アントン・フォン・ハラッハ、パリス・ロドロン、ヒエロニムス・コロレドら歴代の大司教の優れた政治的手腕により、建築学的に見て他に類を見ない都市として建設されたザルツブルクは、三十年戦争の戦火を完全に免れることができたのです。

何世紀も後になって、ナポレオンは特異なザルツブルクの大司教制を破壊し、ナポレオン戦争によって強大な公国の独立は終わりを告げました。最後の大司教ヒエロニムス・コロレドはすべての権限を剥奪され、トスカーナ大公のフェルディナンド3世が最初のハプスブルクとしてザルツブルクの選定公の地位に着任しました。このように、独立を守ってきたザルツブルクとハプスブルク家との繋がりは、長い歴史の中で見れば希薄なものに見えますが、互いの関わりは各時代に消えてはまた現れるということを絶えず繰り返してきました。

19世紀の始めまで、ザルツブルクは大司教が君臨する独立国であったことは前述しましたが、それでもこの地にもハプスブルク家にゆかりのあるものが多く、クレスハイム城には皇帝フランツ・ヨーゼフの末弟ルートヴィッヒ・ヴィクトール大公が住み、ヘルブルン宮殿もその当時はルドルフ皇太子の所有で、庭を散策すると皇妃エリザベットの美しい像に出会います。またザルツブルクは、2006年に生誕250年を迎えたモーツァルトの出身地でもあります。モーツァルトは MARIA・テレジアからフランツ2世が治世した時代に活躍。いまもゆかりの地がたくさん残っており、世界中からファンが訪れます。

1762年9月、6際のモーツァルトはウィーンのシェーンブルン宮殿で MARIA・テレジアを前にした御前演奏を行いました。その際、7歳のマリー・アントワネットにプロポーズしたという逸話は有名です。



歴代大司教の紋章



## ザルツブルクの見どころ

### ●ホーエンザルツブルク城

旧市街南側の岩山の上にそびえており、ケーブルカーで登れます。中央ヨーロッパ最大の城塞建築といわれる街のシンボリック存在。城のテラスからは、素晴らしい数々の教会堂が並び立つ市街の全景や、アルプスの山並みが見渡せ、晴れた日は特に絶景です。

中世城郭の構造がよく分かり大司教の広間などもあって歴史愛好派には必見の価値があります。城内の博物館には昔の武器や工芸品から、拷問室・牢屋まで展示されています。

### ●ミラベル宮殿と庭園

大司教ヴォルフ・ディートリッヒが愛人サロメ・アルトのために建てたもので、現在の建物は1818年の創建。彫刻のある大階段は「天使の階段」と呼ばれ、豪華で美しい大理石の大広間は、コンサートや結婚式に使われています。

ミラベル庭園は、J. E. トゥーン大司教により、フィッシャー・フォン・エルラッハの手で1690年頃造られた庭園。見事な彫刻群や水しぶきが輝く噴水、花が咲き乱れる花壇、生垣で仕切られた野外劇場など、訪れる人々の感動を誘います。

### ●レジデンツ

1600年から19年にわたる改築が行われてできた豪華な大司教の宮殿。ロットマイヤーとアルトモンテ作のフレスコ画で飾られた部屋、モーツァルトが演奏した部屋、天井画が見もの。レジデンツギャラリーには16～19世紀のヨーロッパ絵画が約200点展示されています。

### ●ヘルブルン宮殿

ザルツブルクの南郊にある、17世紀に建てられた大司教の夏の離宮。バロック様式の広大な庭園内に、洞窟や仕掛けの噴水、様々な職人の格好をした人形たちが水力で動く人形劇場などがあり、大人にも子供にも人気があります。

### ●大聖堂

774年の創建時はバジリカ様式でしたが、12世紀にロマネスク様式に改装。1598年末の大火災を機に今の大きさに造り直

され、外観は後期ルネッサンス様式、内装は初期バロック様式の見事なものとなりました。洗礼盤や6000本のパイプからなるヨーロッパ最大のパイプオルガン、ドーム博物館の宝物など、見どころがたくさんあります。

### ●祝祭劇場

大司教の厩舎を1926～28年に祝祭劇場小ホールに改築、その後1956～60年には大ホールが増築されました。2006年のモーツァルトイヤーの際に小劇場は「モーツァルトハウス」としてリニューアルされました。夏のザルツブルク音楽祭のメイン会場としてよく知られています。

### ●モーツァルトの生家

モーツァルトが生まれた建物の4階がそのまま保存されています。典型的な昔のザルツブルク市民の家で、今はモーツァルト博物館として公開されています。

また、この建物が面しているゲトライデガッセ通りは、伝統的な鉄細工の看板が独特の雰囲気醸し出す小路で、旅行者のためのショッピング街となっています。

### ●モーツァルトの住居

ゲトライデガッセ通りの生家から引っ越したモーツァルト一家が、1773年から1787年の間住んだマカルトプラッツ広場8番街の住居で、戦争で破壊され、往時の面影を失っていましたが、復元されて博物館になっています。

ザルツブルク市内観光・モデルプラン		
	交通機関	スケジュール
1	徒歩	終日市内観光。 午前：ゲトライデガッセ、モーツァルト生家、大聖堂、祝祭劇場。 昼食：旧市街にて。 午後：モーツァルト住居、ミラベル宮殿と庭園。 <a href="http://www.salzburg.info">www.salzburg.info</a> 夜：ベーター教会のレストランでモーツァルトディナーコンサート。 <a href="http://www.stiftskellerstpeter.com">www.stiftskellerstpeter.com</a> [ザルツブルク泊]
2	バス	終日ザルツツカンマーグート観光。 終日：サント・ヴォルフガング、Montsee湖など。 <a href="http://www.panoramatoours.com">www.panoramatoours.com</a> 夜：コンサート、マリオネット劇場など。 <a href="http://www.salzburgticket.com">www.salzburgticket.com</a> [ザルツブルク泊]
3	バス	終日自由行動、または日帰り観光。 ●ハプスブルク家のカイザーヴィラのあるバード・イッシュルへ。 (バスにて所要時間1時間半) <a href="http://www.oebb.at">www.oebb.at</a> <a href="http://www.kaiservilla.com">www.kaiservilla.com</a> ●グロースグロックナー 一日観光 <a href="http://www.panoramatoours.com">www.panoramatoours.com</a> ●クレスハイム宮殿内カジノ <a href="http://www.casinos.at">www.casinos.at</a> [ザルツブルク泊]



レジデンツ

# ハプスブルク家 ゆかりの地を訪ねて

Auf den Spuren der Habsburger

ハプスブルク家のルーツは遠く13世紀に遡り、スイス東北部にあるライン河上流域に根城をもった地方の豪族でしたが、その名がヨーロッパ史上に明確に刻まれるのは、一族の始祖と言われるルドルフ1世が1273年に神聖ローマ帝国の王に選出されたからのことです。

以来、ハプスブルク家は中世ヨーロッパのあまたの名家と婚姻により結ばれ、その家領は時代と共に変遷するものの、オーストリアを核とし、ブルゴーニュ、ドイツ、ベルギー、イタリア、スペイン、ポルトガル、ハンガリー、ボヘミア、ポーランド、スロベニア、クロアチア、デンマーク、ルーマニア、ブルガリア、ボスニア・ヘルツェゴビナ等々に及び、1918年までの約640年の間ヨーロッパの大半を支配下におさめ、その間の約5世紀にわたり、神聖ローマ帝国の皇帝の地位を占めました。それだけに、現在に至るヨーロッパの政治、経済、文化、学問などのあらゆる分野に、ハプスブルク家は深く関わり、影響を与え続けて来たのです。

オーストリア各地には、ハプスブルク家の人々が残した歴史的な遺産が数多く点在し、美術館や博物館では現在、彼らが収集した名画や美術品のコレクションを見ることができます。オーストリアでゆかりの地を訪ね、ゆかりの品々をご覧ください。

ウィーン

WIEN

オーストリアの首都であるウィーンは、ハプスブルク家の歴史のうえでも特別な地位を占めています。ルドルフ1世の王位選出以来、ハプスブルク家の主要な居城都市として、常に皇帝一族との深い関わり合いを持ちつづけ、そのためウィーンには同家ゆかりのものが無数にあります。ハプスブルク家の歴史は帝都ウィーンの歴史とともにあったといえます。

2000年の歴史に育まれたヨーロッパの古都ウィーンでは、オーストリア帝国時代にハプスブルク家が栄華を極め、絢爛豪華な宮廷文化を開花させました。そして、ウィーンには今もなお、音楽、美術、建築と、あらゆる文化が実っています。リンク通り（環状道路）に囲まれた旧市街を中心に、ほぼ円形に広がる街を歩くと、その歴史と文化を肌で感じることでしょう。

## シェーンブルン宮殿

世界遺産にも登録されているハプスブルク家の夏の離宮シェーンブルン宮殿は、17世紀の末ごろに建築家フィッシャー・フォン・エルラッハによって、バロック様式の壮麗な狩猟の館として改築されました。ベルサイユ宮殿に対抗して着工されましたが財政難で計画を縮小。18世紀の半ばに、女帝マリア・テレジアの指示でニコラウス・パカッシが改装を行い、現在の



シェーンブルン宮殿



姿となりました。外観はバロック様式、内部はロココ様式で、1400室の部屋があり、現在その内の40室が公開され、外観の黄褐色はマリア・テレジア・イエローと呼ばれています。

訪れる人々の関心を最も引きつけるのは、オリジナルの状態に保存された美しい部屋の内装です。また、バロック様式の広い庭園は、宮殿見学での疲れを心地よく癒してくれます。

6才のモーツァルトが演奏した「鏡の間」や、ナポレオン帝国崩壊後に開催された1815年のウィーン会議で舞踏会場となった「大広間」などが見どころ。

その他、バチカン市国の4倍あるフランス・バロック様式の「シェーンブルン庭園」、1996年に日本人女性によって発見され、再現された「日本庭園」、子供も大人も楽しめる数々のゲームが体験できる「迷路庭園」があります。庭園の縁に沿って敷設された軌道を30分間隔で運転される「ミニ鉄道」が運行されていますので、広い庭園を散策する際にご利用ください。この鉄道は時速15キロで走り、9つの駅を回って1周するのに約45分かかります。

「グロリエッテ」は、両翼と広い階段を従えた3つのアーチから構成された凱旋門。「バルメンハウス(大温室)」は、3つのパピリオンからなるヨーロッパ最大の温室。「シェーンブルン動物園」は、現存する世界最古の動物園で、パンダが人気です。ウィーン市民のみならず国内外からの観光客の憩いスポットとなっています。

また、なじみのある演目を人形で上演する「マリオネット劇場」、モーツァルトやシュトラウスなどコンサートが聴ける「オランジェリー」も有名です。

## 馬車博物館(ワーゲンブルク)

シェーンブルン宮殿にある世界的に有名な馬車博物館(ワーゲンブルク)には、オーストリア皇帝の絢爛豪華な馬車や馬具が展示されています。馬車や馬は自動車が発明されるまで、個人が移動するための最も重要な交通手段でした。生活のあらゆる面で重要視されていただけに、宮廷の芸術家たちもその装飾に相当の力を入れていました。

ワーゲンブルクに展示されている60台以上の馬車、輿、そり



を見ながら、公の式典、旅、狩猟やスポーツなどの余暇、子供の遊び、死そして葬儀など宮廷生活の様子を違った角度から思い巡らすことができます。同時に、女帝マリア・テレジア、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世と皇妃エリザベト、そしてナポレオン1世といった様々な個性の持主たちが歩んだ人生も知ることができます。

## ホーフブルク王宮

ハプスブルク家の居城だった壮大な王宮です。ミヒャエル広場に面しているのが13~18世紀に造られた旧王宮、リンク沿いに建つのが19~20世紀にできた新王宮です。

旧王宮には、歴代のハプスブルク家の皇帝たちが使っていた一連の部屋などの他、以下に挙げる王宮宝物館や王宮礼拝堂など、歴史的に重要な様々な見どころが目白押しです。

新王宮には現在、国際的なコンベンションなどに使われる大小の会議場や、いくつかの博物館があります。中でも、エフェソス博物館や民族学博物館が見ものです。

\*シシィ・ミュージアム：美しさを追い求めた「シシィ」こと皇妃エリザベトが使ったエクササイズのトレーニングの道具や、初めて宮殿内に持ち込んだバス・タブなど、宮廷の因習を打ち破った彼女の部屋を再現しています。婚礼前夜に着ていたドレス(複製)、モーニングガウン、日傘、扇子、手袋、エリザベトが旅で使用した特別客車(複製)、デスマスクなどを展示しています。



シシィ・ミュージアム



- \* 王宮宝物館：ハプスブルク家の威光を物語る莫大な財宝、儀式的衣装、調度品などの展示。神聖ローマ帝国皇帝やオーストリア皇帝の冠などはここにあります。
- \* 宮廷銀器コレクション：宮廷で使った食卓調度品や食器やテーブルセットの展示。
- \* 王宮礼拝堂：13世紀にできた王宮最古の部分。今も礼拝が行われており、マキシミアン1世が創設した少年合唱団は、現在もウィーン少年合唱団として活躍しています。
- \* 国立図書館（プルンクザール）：世界一美しいと言われる図書館。220万冊の蔵書をはじめ、何万冊もの写本を所有。壁画、天井画、大理石の柱など豪華に内装を見学できます。
- \* フォルクスガルテン：王宮に隣接する庭園フォルクスガルテンは、市民の憩いの場として親しまれており、エリザベートの彫像があります。

## スペイン式馬術学校

16世紀、ハプスブルク家のもとで設立された馬術学校。古典的な宮廷馬術を400年間守り続け、その演技を一般公開しています。世界で最も美しいバロック様式のホールで繰り広げられる、リピッツァー種の白馬が織りなす一条乱れぬパフォーマンスをご覧ください。王宮の一面にあるバロック様式の演技場で、その華麗な演技を見ることができます。

\* 公演期間は毎年3～6月頃と9～10月頃。



スペイン式馬術学校



## アウグスティーナキルヒェ教会

ハプスブルク家代々の結婚式が執り行われ、地下には代々の心臓が安置されています。

ちなみに、ハプスブルク家の慣例により心臓がここ、内蔵がシュテファン大寺院、その他の部分はカプチナーグルフトにそれぞれ収められています。

## 皇帝納骨所（カプチナーグルフト）

カプチナー教会地下にある墓所。ハプスブルク家代々の棺があり、約140名が永眠しています。最も大きなマリア・テレジアとフランツ1世の棺をはじめ、質素なものから豪華で芸術的なものまで、皇帝たちの人となりを表す棺が安置されています。シシィの棺などには、今も献花が絶えません。

## シュテファン大寺院

旧市街の中心にあり、ウィーンのシンボリックなゴシック様式の大聖堂です。130mもの高さの南塔と、色とりどりの美しい屋根が特徴で、北塔には重さ21トンという、国内一の大きな鐘「ブンメルン」があります。南塔は343段の階段で73mの高さまで、北塔はエレベーターで60mの高さまで登ることができ、ともに市内のパノラマを一望することができます。

内部には石造りの説教壇や、創立者ルドルフ4世の像などがあります。また、カタコンベ（地下墓地）には、フリードリヒ3世の棺をはじめ、ハプスブルク家代々の人々の内蔵を収めた壺が保存されています。

## ベルヴェデーレ宮殿

対トルコ戦争での英雄オイゲン公の夏の離宮として建てられました。大きな噴水や植え込み、池を配した広大な庭園内に、壮麗なバロック様式の上宮と下宮の2つの宮殿があります。上宮は接客用、下宮は住居用として使っていたもので、現在下宮はバロック美術館に、上宮はクリムトの「接吻」やシーレの「自画像」などの名画を数多く展示する、19・20世紀絵画館オーストリア・ギャラリーになっています。



## カールスキルヒェ教会

マリア・テレジアの父カール6世が、当時流行したペストの終息を祈願して1716年～1739年に建立。バロック建築の巨匠フイッシャー・フォン・エルラッハの設計。

## ウィーン市立博物館 カールスプラッツ

一番最初の定住者からローマ時代、ハーベンベルク家の時代を経て、ハプスブルク家640年間の治世を貫くウィーンの歴史の全体像が、非常に分かりやすい形で展示されています。1階は先史時代～中世、2階は16～18世紀、3階は19～20世紀、古地図や市街模型等で往年のウィーンの様子が知ることができます。

## ウィーン美術史博物館

ハプスブルク家が世界各地から集めた絵画がある世界的に有名な美術館のひとつ。ブリューゲルの作品群が特に有名で、その他、ルーベンス、レンブラント、ベラスケス、ラファエロ、ヴァン・ダイク、デューラーなど多数の有名な画家の絵画が展示。

## ウィーン自然史博物館

マリア・テレジア記念像をはさんで美術史博物館と向かい合う建物。先史時代からの動物、植物、鉱物やハルシュタット文化時代の出土品、約2万5千年前の「ヴィレンドルフのヴィーナス」像、マリア・テレジアの「宝石の花束」などが有名。



ウィーン自然史博物館

## アルベルティーナ

美術史家の間で世界最大のグラフィック・アートのコレクションを所蔵する美術博物館としてよく知られている、市の中心にあるアルベルティーナは、2003年3月に十年の歳月をかけて巨大な展示空間として改装されました。また、新たに修復されたハプスブルク家で最も裕福だった大公アルブレヒトの大広間も公開されています。

## ウィーン国立オペラ座

1861年から1869年にかけて宮廷オペラ劇場として建てられました。1945年に戦災を受けましたが修復され、1955年カール・ベームの指揮するベートーヴェンのオペラ「フィデリオ」で再開されました。7月、8月を除くほとんど毎日オペラやバレエが観賞できます。

## リング通り

シュテファン大寺院を中心に、街の中心部を囲んでいる幅広い環状道路が「リング通り」。かつて市を守る城壁と濠があった所で、19世紀の半ば、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の勅令によってそれらが取り除かれ、ここに市庁舎、国会議事堂、ブルク劇場、ウィーン大学などが建ち並びます。現在は街路樹が美しい環状道路で市電が走っています。

リング通りが囲む旧市街は世界遺産に登録されています。

ウィーン市内観光・モデルプラン		
	交通機関	スケジュール
1	徒歩	終日市内観光。 午前：シュテファン大寺院、カプツィーナグルフト、アルベルティーナ、アウグスティーナーキルヒェ教会。 <a href="http://www.vienna.info/jp">www.vienna.info/jp</a> 昼食：旧市街にて。 午後：シシ・ミュージアム、王宮宝物館、美術史博物館。 夜：オペラやコンサート。 <a href="http://www.wiener-staatsoper.at">www.wiener-staatsoper.at</a> <a href="http://www.mozart.co.at">www.mozart.co.at</a> <a href="http://www.imagevienna.com">www.imagevienna.com</a> [ウィーン泊]
2	市電	終日市内観光。 午前：シェーンブルン宮殿、馬車博物館、グロリエッテ。 昼食：宮殿内にて。 午後：ベルヴェデーレ宮殿。 夜：高級レストランでゆっくりと。 [ウィーン泊]
3	バス・船	終日自由行動、または日帰り観光。 ●ワッハウ渓谷 ドナウ観光船 <a href="http://www.ddsg-blue-danube.at">www.ddsg-blue-danube.at</a> ●ウィーンの森半日観光 <a href="http://www.jalpak.at">www.jalpak.at</a> <a href="http://www.myu-info.co.jp">www.myu-info.co.jp</a> ●世界遺産ブルゲンラント [ウィーン泊]



リング通りに接するブルク劇場と旧市街の街並み

# GRAZ und UMGEBUNG

## グラーツ

シュタイヤマルク州の州都グラーツは、ウィーンに次ぐオーストリア第2の都市で、旧市街は世界遺産にも登録されている美しい町です。このシュタイヤマルク州は、中世の昔は独立の侯国でハプスブルク家の一族が統治し君臨していました。グラーツはその居城都市として長い歴史を持ち、美しい旧市街と、近郊にも趣深い古城や民俗村野外博物館などがあります。

グラーツには、15世紀に皇帝フリードリッヒ3世が建てた王宮が今も残っています。州立博物館ヨアネムは、18世紀にヨハン大公が創設したものです。また、フリードリッヒ3世の家憲AEIOUの石刻が多く見られます。

### ●ヨハン大公 (1782～1859年)

「シュタイヤマルクのプリンス」と呼ばれるヨハン大公は、1782年、女帝マリア・テレジアの三男であるレオポルド(後の皇帝)とスペイン王女マリア・ルドヴィカの13番目の子どもとして生まれました。19世紀の激動の時代に活発化した産業教育や社会福祉の遠大な先覚者として広く知られています。

ヨハン大公は非常に活動的で、庶民的な人柄であり民主主義的な思想を持っていました。シュタイヤマルク州の農業、鉱工業、林業を大きな繁栄へと導き、その他にも学校や病院の開設を進め、学問の推進者ともなりました。1811年、グラーツに自然

科学の研究と技術教育を目的とした「ヨアネウム」を設立。これが今日のレオーベン鉱業大学、グラーツ工科大学、州立ヨアネウム博物館、図書館などに発展しています。

ヨハン大公は、今なお民謡の中に謳いこまれていて、人々に敬慕されています。それはさまざまな偉業を果たしたという以外に、平民の娘アンナ・プロッヘルとの恋を貫き通し、民間人とまでなつて結婚したことにも由来しています。

### ●中央広場と市庁舎

1160年に誕生した中央広場は、街の中心部です。時とともに行商人らの往来が盛んになり、商取引を行う市場へと発達しました。広場の南側にそびえ立つのが市庁舎。広場の中心には1878年に立てられたヨハン大公の記念像があります。

### ●グラーツの旧市街

世界遺産に指定されているグラーツの旧市街、ハウプトプラッツ広場とそのあたり一帯の通りには、華やかな漆喰細工で飾られた家や、古風なアーケードや出窓を持つ家が多く、昔ながらの町並みが好きな人にはたまらない魅力です。このような建物も内部は洒落たブティックやカフェ・レストランになっていて、散策の楽しみは尽きません。

### ●シュロスベルク(城山)

旧市街の中心にあるハウプトプラッツ広場から、まず旧市街の北側にあるシュロスベルクに登ってみましょう。石段を登ってもよし、シュロスベルクバーンというケーブルカーに乗ることもできます。昔は壮大堅固な城だったのですが、ナポレオン軍に破壊されたため、今では鐘楼と時計塔しか残っていません。しかし城山の上からはグラーツの街、ムーア川、そしてアルプスの前山が一望できます。



中央広場のヨハン大公像と市庁舎



シュロスベルク山頂の時計塔





### ●武器庫 (ツォイクハウス)

15世紀末以来東辺の軍事都市として貯えた武器を、17世紀にトルコ軍に対する防衛のために建設された武器庫で、約3万点に及ぶ中世の甲冑や武器が往時そのままに展示され、その規模はヨーロッパ随一と言われています。1643年以来、“いつでも一軍を装備できる状態”に保存されています。

### ●州庁舎と中庭

豪華な回廊が美しい中庭では、ルネッサンス芸術の傑作を目の当たりにできます。夏にはこの中庭で野外映画祭が、また、アドヴェント(キリスト待降節)の時期にもイベントで賑わいます。

### ●王宮 (ブルク)

大聖堂の向かいにある王宮は、のちの皇帝フリードリッヒ3世が1438~1452年にかけて建造させ、皇帝になってから何十年もの間、治世の本陣を構えていました。

その後、皇帝マキシミリアン1世が拡張しています。1499年に作られたゴシック様式の「二重らせん階段」は、きわめてユニークな建築物として知られています。

### ●大聖堂

皇帝フリードリッヒ3世が王宮礼拝堂として、王宮の向かいに建造させました。内部には、数多くの芸術品があります。大聖堂の南側の左手、屋根の下には1480年にシュタイヤマルクを襲った三つの苦難を描いた「国三重苦画」(1485年)が見られます。



グラーツの大聖堂

### ●エッゲンベルク城

旧市街の西端、車で10分足らずの所にあるシュタイヤマルク総督が17~18世紀にかけて建てた見事なパロック様式の宮殿です。広大な庭園には孔雀が放し飼いされています。

グラーツ市内観光・モデルプラン	
交通機関	スケジュール
1 徒歩	終日市内観光。 午前：州庁舎、武器庫、大聖堂、王宮の螺旋階段。 昼食：旧市街にて。 午後：ケーブルカーでシュロスベルクへ。帰りはふらふらと徒歩で。 夕食：市内で一番賑わう場所バムューダトライアングルで。 <a href="http://www.graztourismus.at">www.graztourismus.at</a> [ グラーツ泊 ]
2 バス	市内観光。 午前：エッゲンベルク宮殿見学。 午後：自由行動。 夜：オペラまたはコンサートへ。 <a href="http://www.theater-graz.com">www.theater-graz.com</a> [ グラーツ泊 ]
3 バス	終日自由行動、または 日帰り観光。(グラーツ市観光局主催) ●リピッツァーナー馬の故郷とファンタルトヴァッサー教会/ 7月、8月の毎土曜の14時から。 ●南シュタイヤマルクのワイン街道/9月、10月の毎土曜の14時から。 ●伝説の城 リーガースブルク城を訪ねて/4月~6月の毎土曜の14時から。 <a href="http://www.graztourismus.at">www.graztourismus.at</a> [ グラーツ泊 ]



ピーバーの養馬場

### グラーツ周辺

●ピーバー ウィーンのスペイン式馬術学校で高等馬術の演技を見せる白馬たち。馬の中の貴族リピッツァー種の故郷がここピーバーです。ハプスブルク家がスペインをも統治していた16世紀、スペインのアンダルシア馬を導入し、リピッツァーの帝室養馬場で古典馬術のための理想の血統が生み出されました。第一次大戦後リピッツァーがユーゴスラビア領になってからは、グラーツ近郊のピーバーが馬たちの新たな故郷となり、血統誕生の地を記念して今もリピッツァー種と呼ばれています。

●レオーベン 州の中での第2の都市。カール大公が対決したナポレオン戦争の際、1797年にここで予備的な和約が結ばれ、それがカンポ・フォルミオの平和条約に発展しました。ナポレオンハウスという博物館があり、1849年に採鉱と冶金の学校がここに移転しています。

●バード・アウスゼー 御料地の役所だった建物には、帝国の紋章「双頭の鷲」が掲げられおり、かつての岩塩の役所はいま博物館になっています。平民の郵便局長の娘であり、後にヨハン大公の妃となった英明なアンナ・プロッヘルが生家も残っています。病院付属教会の「三位一体の祭壇」は、1449年にフリードリッヒ3世により寄進されたものです。

# INNSBRUCK und TIROL

## インスブルック

雄大なアルプスの高峰に囲まれたヨーロッパ・アルプス最大の古都インスブルックはチロル州の州都です。古代ローマ帝国時代以来、ヨーロッパの東西南北を結ぶ交通の要衝として大変重要な役割を果たしてきました。15世紀から16世紀にかけてインスブルックはウィーンよりも豊かで、皇帝マキシミアン1世もここからハプスブルク帝国の政治を行っていました。インスブルックが「ハプスブルク帝国の陰の首都」と呼ばれるのもこのためです。また、大量の岩塩と銀が採れ「チロルはハプスブルグ帝国のお財布」とうたわれたのもこの時期からです。

このような状況からハプスブルク家は「何があってもチロルだけは手放しては行けない」とチロルを特別扱いしました。チロルには様々な特権があったのですが、最も有名なのは「チロル人はチロルを守る以外はハプスブルク帝国がどこで戦争してもハプスブルク軍に徴兵されない」という権利です。これはハプスブルク帝国広しと言えど、チロルのみの特権でした。

### ●黄金の小屋根

ハプスブルク家の黄金時代を築いた皇帝マキシミアン1世のもとで、広場の行事を見物するときの宮廷用観覧席として建てられた、後期ゴシック様式の張り出しテラスで、金箔をはった2657枚の瓦から、“黄金の小屋根”と呼ばれています。



ホーフブルク王宮

### ●ホーフブルク王宮

ジークムント大公が1460年に創建、その後女帝マリア・テレジアが改築した、丸屋根が美しい宮殿。通常王宮はどこの国もひとつ首都にあるのみですが、オーストリアにはホーフブルクと呼ばれる王宮はインスブルックとウィーンに各々ひとつずつあります。これこそインスブルックが「ハプスブルグ帝国陰の首都」として栄えた証です。

### ●宮廷教会

入口はチロル民族博物館と同じ。マキシミアン1世の像が置かれた棺と、ゆかりの28の見事なブロンズ像がある教会として有名。デューラーのデザインしたアーサー王の像や、チロルの英雄アンドレアス・ホーフアーの墓が教会内にあります。



イン川とインスブルックの街並み

## ●アンブラス城

ハプスブルク家ゆかりのルネッサンス様式の城、アンブラス城は、1564年に増築され現在の規模になりました。チロル大公フェルディナンド2世が、愛妻で平民出身の妃フィリピーネのために11世紀の城をルネッサンス様式に改築・拡張し、財力にものを言わせてそこに膨大な美術工芸品や武具甲冑を収集展示しました。この収集品が、ウィーン美術史博物館やハプスブルク家の絵画や美術工芸品の基礎となりました。図書室、武器と甲冑の展示室の他に、43mの奥行きを持つスペイン広間もあり、大広間では古楽器コンサートが開催されることもあります。



インスブルック市内観光・モデルプラン		
交通機関	スケジュール	
1	徒歩  バス	終日市内観光。 午前：黄金の小屋根、ホーフブルク王宮、宮廷教会、大聖堂。 昼食：旧市街のレストランで。 午後：アンブラス城見学、または ケーブルカーでノルトケッテへ。 夜：チロルの夕べ。 <a href="http://www.tiroleralpenbuehne.com">www.tiroleralpenbuehne.com</a> [インスブルック泊]
2	列車・タクシー	午前：列車(イェンパツハ乗換)とタクシーでトラッツベルク城へ。 <a href="http://www.schloss-tratzberg.at">www.schloss-tratzberg.at</a> 昼食：お城ふもとのレストランにて。 午後：自由行動。 夜：インスブルックのカジノへ。 <a href="http://www.innsbruck.info">www.innsbruck.info</a> [インスブルック泊]
3	徒歩 または バス	終日自由行動、または 日帰り観光。 ●アルプ스에囲まれたアーヘンゼーのSLと遊覧船。 <a href="http://www.achenseebahn.at">www.achenseebahn.at</a> ●ゼーフェルトヘブライベートハイキング。(ガイド同行) <a href="http://www.seefeld.com">www.seefeld.com</a> ●オーストリアダンス教師協会会長ボーライダンススクールにて ワルツとハプスブルク式マナーレッスン。 <a href="http://www.tirol-info.jp">www.tirol-info.jp</a> <a href="http://www.tirol.at">www.tirol.at</a> [インスブルック泊]



シュヴァーツの鉱山見学

な賊原として「あらゆる鉱山の母」と呼ばれ、鉱山、教区、教会、修道院聖堂、フッガー家の屋敷などがあります。すでに16世紀から鉱山では8時間労働がとられ、カール5世やフェリペ2世も新大陸の鉱山にもそのシステムを採用しました。

## ●トラッツベルク城

中世最後の騎士で名高いマキシミアン1世の狩りの館であったトラッツベルク城は、ヨーロッパでも最も美しいゴシック様式の城砦として知られており、ハプスブルク家の家系図が壁一面に描かれていることでも有名で、現在もハプスブルク家の末裔が居城しています。インスブルックからザルツブルクへ向かう途中の町シュタンスにあり、ヘッドホンによる7ヶ国語(日本語あり)のオーディオビジュアルガイドも行われています。いつも大勢のヨーロッパからの観光客が訪れており、麓からかわいらしい電気自動車で城まで上ります。



トラッツベルク城のハプスブルク家の家系図

## チロル州の街々

### ●ハル・イン・チロル

イン河畔の台地にある中世都市。昔はイン川の水運の要地として、また豊富な岩塩の産地として繁栄をうたわれました。河畔にそびえる14世紀初頭に建てられたハーゼック城では、マキシミアン1世が結婚式を挙げました。チロル地方に産する銀を用いて、城内の塔では19世紀の初めまでドルの語源となった「ターラー銀貨」の製造が行われていました。このコインはヨーロッパ中で使うことができる非常に価値のある通貨でした。今は自分で記念コインが造れる博物館として人気を集めています。また、ここハルの旧市街ではフォークとナイフを使わない「中世時代料理」のディナーが体験できます。ろうそくの灯りのもと500年前の雰囲気をお楽しみください。

### ●ラッテンベルクとクラムザッハ

ラッテンベルクはイン川に臨む愛らしい中世都市。壁画や出窓のある古雅な家々が並んでいます。今ではクラムザッハと共にガラス工芸の町としても有名です。クラムザッハには、広大な自然の林野をそのまま敷地にして、チロル各地の伝統的な農家を多数移築した野外博物館があります。

### ●シュヴァーツ

イン渓谷にあるシュヴァーツの銀山は、ハプスブルク家の大き

ホーエンヴェルフェン城



## ザルツブルク州

### ●ヴェルフェン

ザルツブルク南方にあるホーエンヴェルフェン城の最後の城主はオイゲン公で、近くには皇室の御猟場ブリュンバッハがあります。オーストリアやドイツ語圏で何度も賞に輝き、ミシュラン2ツ星に選ばれ、ゴー・ミヨではシェフズ・ハット賞を受賞した「レストラン・オーバウアー」はここに 있습니다。

### ●バード・ガスタイン

ハプスブルク家の人々もしばしば訪れた温泉保養地。最初にここで湯治をしたのはフリードリッヒ3世でした。1865年にここで皇帝フランツ・ヨーゼフ1世とドイツ皇帝ヴィルヘルム1世の間で「ガスタイン条約」が結ばれました。

ここから車で約20分のところに、世界的に有名なハイルシュトレンのラドンセラピーの坑道があります。

### ●バート・ホーフガスタイン

1828年、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世によりこの温泉保養地が造られました。

## フォアアールベルク州

### ●ブレゲンツ

中世以来の州議会が、貴族や僧侶によらず市民や農民の合議でなされたという伝統に特色があります。州立博物館にはその歴史的な展示とともに、マリア・テレジアの皇女でナポリ王妃となったマリア・カロリーナの肖像があります。

かつて城壁に囲まれていた高台の旧市街オーバーシュタットのマルティン塔には郷土博物館があり、近くの聖ガルス教会の祭壇にはマリア・テレジアが羊飼いの女として描かれています。

クラーゲンフルトのラントハウス内にある紋章の間



## ケルンテン州

### ●クラーゲンフルト

中世以来州議会が開かれていたラントハウスの大広間には、ケルンテン州の貴族たちの紋章がびっしりと壁面を飾り、天井には皇帝カール6世の事跡が描かれています。皇帝の孫であり、またマリア・テレジアの娘のマリア・アンナは、1789年に死没するまでこの地に住み、学問を奨励、ローマ時代の遺跡の発掘を指導し多額の援助をしました。彼女の墓が看病と奉仕で知られるエリザベート修道院にあります。

## オーバーエーステライヒ州

### ●リンツ

1485～1493年の間フリードリッヒ3世がこの地の城に居住、旧市街のクレムスミュンスターハウスで死没、教区教会に墓碑があります。1600年頃皇帝ルドルフ2世により城館が造られ東門に紋章と銘記があります。皇帝レオポルド1世の娘の一人マリア・エリザベート、マリア・テレジアとフランツ・シュテファンの子で同じ名前の子で同じ名前のマリア・エリザベートもここで生まれています。

近くにサンクト・フローリアン修道院があり、豪華華麗な大広間や14の皇帝の間で知られ、皇帝フェルディナンド1世の娘で、ポーランド王妃となったカタリーナの墓があります。



リンツ近郊のサンクト・フローリアン修道院



●バード・イッシュル

1821年以來の、皇室と縁の深い食塩泉保養地として発展した町。皇帝フランツ・ヨーゼフ1世が何十年もの長い治世の間ここを避暑地としていたため、スペイン王アルフォンソ12世、イギリス王エドワード7世など、多くの貴賓たちが訪れています。皇帝の別荘カイザーヴィラ、現在写真博物館になっている皇妃エリザベート(愛称シィシ)のティーハウス、狩猟姿の皇帝の記念碑、遊歩道に臨む音楽堂、皇帝とシィシが婚約したホテル・オーストリアなど、見るべきところがたくさんあります。また、皇室御用達のケーキ屋さん「ツァウナー」でのコーヒーブレイクもお薦めです。

●グムンデン

皇帝の御料地ザルツカンマーグートで採掘される岩塩の集散地。カンマーホーフは、全国の岩塩を統括する役所でしたが今は博物館になっています。オルト城は前トスカーナ大公の居城で、ヨハン・サルヴァートル・ハプスブルク大公が住んでいました。他にもハプスブルク家ゆかりのものが多く、双頭の鷲の紋章、世界最古の石炭蒸気船ギゼラ号、今も操業しているヨーロッパ最古の鉄道駅などが見られます。

●サンクト・ヴォルフガング

ホテル・ヴァイセス・レッセル(白馬亭)は、最後の幕に皇帝フランツ・ヨーゼフ1世が登場するオペレッタの舞台。有名なゴシック様式の祭壇がある巡礼教会も見もの。性急に改革を押し進めた皇帝ヨーゼフ2世は、巡礼に制限を加えて民衆の怒りを招きました。



サンクト・ヴォルフガングの「白馬亭」(手前の黄色い建物)



ニーダーエーステライヒ州

●サンクト・ペルテン

オーストリアの州都としては最も新しい街ですが、古い歴史を持ち都市権を得たのは1247年のことです。バロック時代の街並がよく保存され、市庁舎には皇帝たちの肖像が並ぶしつくい細工の天井があり、市立博物館にはハプスブルク時代の記念の品々や、文書、絵画などが多く展示されています。

●ドイッチュ・ヴァグラム

カール大公がアスペルンの近くでナポレオン軍に戦勝した後、1809年7月オーストリア軍はこの近くでナポレオンに破れました。博物館があります。

●バーデン・バイ・ウィーン

15世紀中頃、皇帝フリードリッヒ3世から都市権を与えられたローマ時代からの温泉保養地。1811年に、中央広場に面して建てられた皇帝フランツ1世の夏の館の他、ハプスブルク一族のゆかりの建物も多く、カール大公の城館、ワインブルク城、メッテルニヒの邸宅の名残などがあります。ヨーゼフ2世、フランツ・ヨーゼフ1世の記念碑、いくつもの博物館などもあり、町はビーダーマイヤー時代の面影をとどめています。

●アルトシュテッテン

フランツ・ヨーゼフ1世の弟カール・ルートヴィッヒ大公の城で、その後サラエボで暗殺された皇位継承者フランツ・フェルディナンドのものとなり、いまはその家族の所有で、“第一次大戦の最初の死者”である彼とその妃が地下で眠っています。近くのルーベレック城では皇帝フランツ1世に関する展示を見ることができます。



アルトシュテッテンにあるフランツ・フェルディナンド夫妻の棺



## ブルゲンランド州

### ●アイゼンシュタット

この地は1622年に皇帝フェルディナンド2世からエステルハージー家に下賜されたもので、第一次大戦が終わるまでは、オーストリア＝ハンガリー帝国内のハンガリーの一部でした。エステルハージー城の歴史的な大広間や州立博物館には、この州がハンガリー王国に属していた時代を物語る、いろいろなものがあります。

### ●マイヤーリンク

元は皇帝の狩りの館でしたが、皇太子ルドルフが1889年にここで悲劇の心中をとげた後、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世がここを修道院にしました。修道院には日本語の説明書が用意されています。

### ●ラクセンブルク

フランツェンスブルグ城は、オーストリアのロマネスク様式の代表作。1858年にルドルフ皇太子がここの旧城で生まれました。バロック様式の町のたたずまいも見もので、昔の駅の前にはベネチアの象徴「サン・マルコの獅子像」があります。当時ベネチアはオーストリア領でした。



ラクセンブルクのフランツェンスブルグ城